

『上杉鷹山の藩政改革とファイナンス』研究シリーズ3

酒田・本間家と米沢藩 ～「大帳類聚抄」分析を中心として

2019年9月

加藤 国雄©

<内容>

1. 酒田・本間家と中興の祖・3代目光丘
2. 本間家史料「大帳類聚抄」
3. 米沢藩との金融取引の推移と特徴
4. I期(1754～82年)の金融取引
5. II期(1783～1801年)の金融取引①～改革第2期
6. II期(1783～1801年)の金融取引②～改革第3期

酒田・本間家と米沢藩～「大帳類聚抄」分析を中心として

(目的)

酒田・本間家の米沢藩との金融取引を、本間家の金融取引明細史料「大帳類聚抄」の分析を中心に示す。

(要約)

- ・本間家の米沢藩との金融取引は1754年から始まる。藩産物を担保とするものなど長くて1年の短期貸付中心である。当初の金利は年15～18%中心で、本間家の大名貸しは貸倒リスクが小さく収益性の高いビジネスだったようだ。
- ・米沢藩改革第1期までの金融取引は、金額は少なく断続的だった。返済も滞りがちだった。取引が活発化するのには、改革第2期以降である。米沢藩が財政再悪化し、長期化借入の低金利化や永年賦化を強行し多くの金主が離反する中で、短期貸付中心の本間家は取引を増やしたことになる。
- ・第3期改革をすすめる莅戸善政は、財政再建計画を示した上で、2500両の長期借入を本間家に要請した。本間家中興の祖・3代目光丘はそれに応じ、勸農資金を提案し提供した。その後も、2度の幕府への手伝い普請に対する計8千両の長期貸付にも応じ、毎年備籾代を献納するなど奉仕面でも貢献した。
- ・本間家の支援を見て、離反していた三谷家や渡辺家など有力金主も復帰した。米沢藩の藩政改革は第3期でようやく成功に至ったが、本間家の改革第2期以降での本間家の貢献が大きかった。

酒田・本間家と中興の祖 3代目光丘^{みつおか}

- 「本間様には及びもないが、せめてなりたや殿様に」と称された豪商・豪農である。
- 北前船交易などの商業から、金融(大名貸しなど)、田地経営へと業容を拡大し財を成した。
- 米沢藩との金融取引は、本間家中興の祖・3代目光丘(1732～1801)が家督を継いだ1754年からである。
- 光丘は、自費での酒田の砂防植林、地元・庄内藩への金融支援・寄附・藩政参画など社会貢献にも熱心だった。それは米沢藩との関係でもうかがえる。

1. 酒田・本間家と中興の祖 3代目光丘

酒田・本間家は、「本間様には及びもないが、せめてなりたや殿様に」と称された豪商・豪農である。北前船交易などの商業から、金融(大名貸しなど)、田地経営へと業容を拡大し財を成した。

米沢藩との金融取引は、本間家中興の祖・3代目光丘(1732～1801)が家督を継いだ1754年からである。

光丘は、自費での酒田の砂防植林、地元・庄内藩への金融支援・寄附・藩政参画など社会貢献にも熱心だった。それは米沢藩との関係でもうかがえる。

本間家史料「大帳類聚抄」

●本間家の詳細な金融取引などは大福帳として残っており、それを項目別に整理したのが「大帳類聚抄」である。

●米沢藩との時期別取引額合計を示したのが下表。鷹山改革第3期途中の1800年までに取引の2/3弱が集中している。

1756～1800年(45年間)	19.3万両
1801～1825年(25年間)	7.3万両
1826～1862年(37年間)	2.3万両
1863～1873年(11年間)	2.3万両
合 計	31.3万両

(出所)『酒田市史史料篇第5集経済篇』巻末表より。銀60匁=1両として

●『酒田市史 史料篇第5集経済篇』に、米沢藩について集録されている明細データは、1754年から1801年までのものと、1863年以降のものである。そこで本件研究は、上記の取引が集中している時期をカバーする1754年から1801年までの48年間の集録明細データについて分析する。

2. 本間家史料「大帳類聚抄」

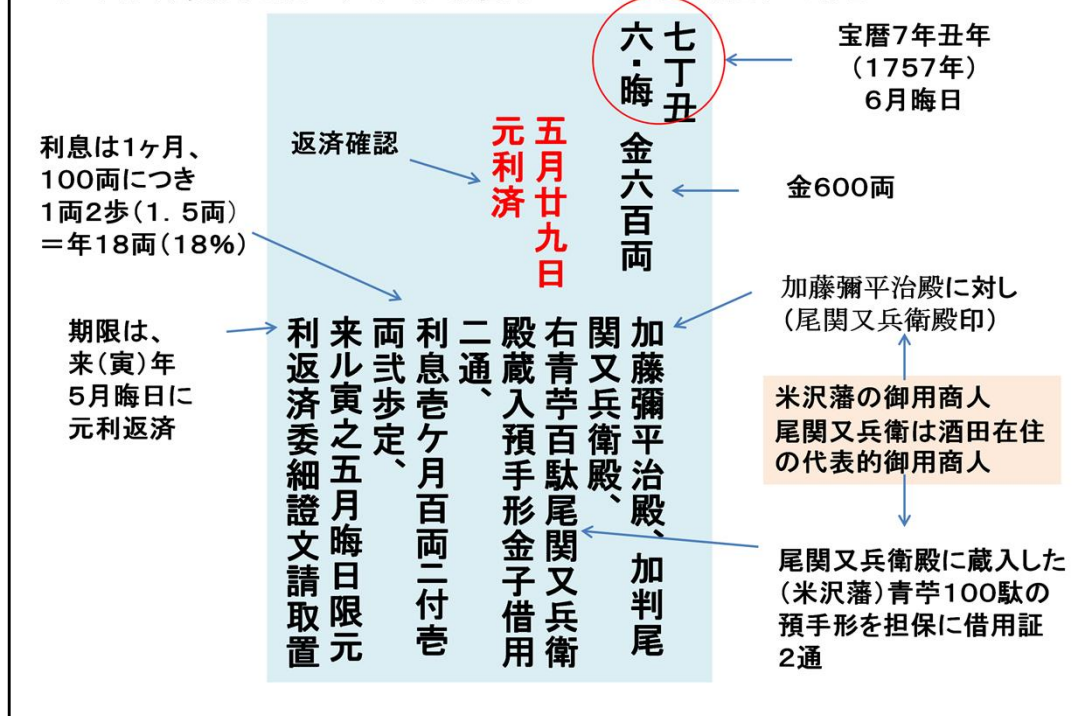
1) 本間家と米沢藩の金融取引

本間家の詳細な金融取引などは大福帳として残っており、それを項目別に整理したのが「大帳類聚抄」である。

米沢藩との時期別取引額合計を示したのがスライド内の表である。鷹山改革第3期途中の1800年までに取引の2/3弱が集中している。

『酒田市史 史料篇第5集経済篇』に、米沢藩について集録されている明細データは、1754年から1801年までのものと、1863年以降のものである。そこで本研究は、上記の取引が集中している時期をカバーする1754年から1801年までの48年間の集録明細データについて分析する。上で示したように、本間家と米沢藩の金融取引の盛んだった時期である。

大帳類聚抄(米沢藩)の取引記入例



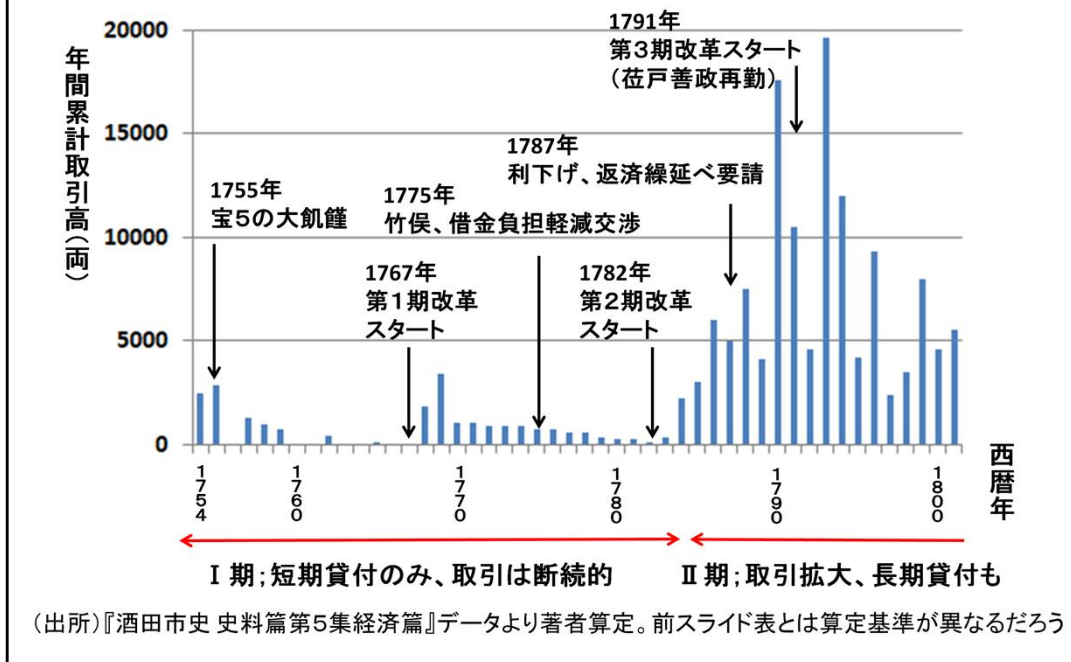
2) 大帳類聚抄(米沢藩)の取引記入例

本間家の大福帳(大帳類聚抄より)の取引記入例を示す。

この例は、次のような期限11ヶ月の米沢藩青苧を担保とする600両の貸付けである。

- ・宝暦7年6月晦日、酒田・御用商人尾関又兵衛の蔵入した青苧100駄を担保とし金600両を御用商人・加藤彌平治殿へ
- ・利息は1ヶ月100両につき1両2歩(1.5両)、年18両(18%)
- ・期限は、来(寅)年5月晦日に元利返済、委細は證文に
- ・確かに、翌年5月29日に元利(推定699両)返済された

本間家の米沢藩との金融取引(主として貸付)高推移 (1754~1801年)



3. 米沢藩との金融取引の推移と特徴

1) 本間家の米沢藩との金融取引(主として貸付)高推移(1754~1801年)

本スライドは、1754年から1801年までの年別金融取引合計額の推移を示している。つまり、各年の金融取引(主として貸付)高を合計したものであり、貸付残高を示すものではない。

図より、取引の活発さから次の2期に分けて観察する。

I 期(1754年~82年; 第1期末改革末まで); 短期貸付のみ、取引は断続的
最初の1750年代に取引は多いが、1760年代に入ると少なくなり鷹山が藩主にするあたりから再度活発になる。

II 期(1783年; 第2期改革初~1801年); 取引拡大、長期貸付も

米沢藩との金融取引の特徴

- 金融取引の大部分は、長くて1年程度の短期貸出で、多くは米・青苧などの藩産物を担保したものや支払約束手形の割引などである。
- 本間家にとって貸倒れリスクが小さい取引のはずだが、金利は当初年利15～18%（月利1.25～1.5%）中心と、長期貸出中心の渡辺家の利回り（9.5%程度）よりもかなり高い。
- 上記は、他藩との金融取引にも当てはまる。本間家の大名への短期貸付は低リスクで収益性の高い事業だったと言える。
- 短期貸付金利が長期貸付金利より高いのはなぜか？

2) 米沢藩との金融取引の特徴

金融取引の大部分は、長くて1年程度の短期貸出で、多くは米・青苧などの藩産物を担保したものや支払約束手形の割引などである。

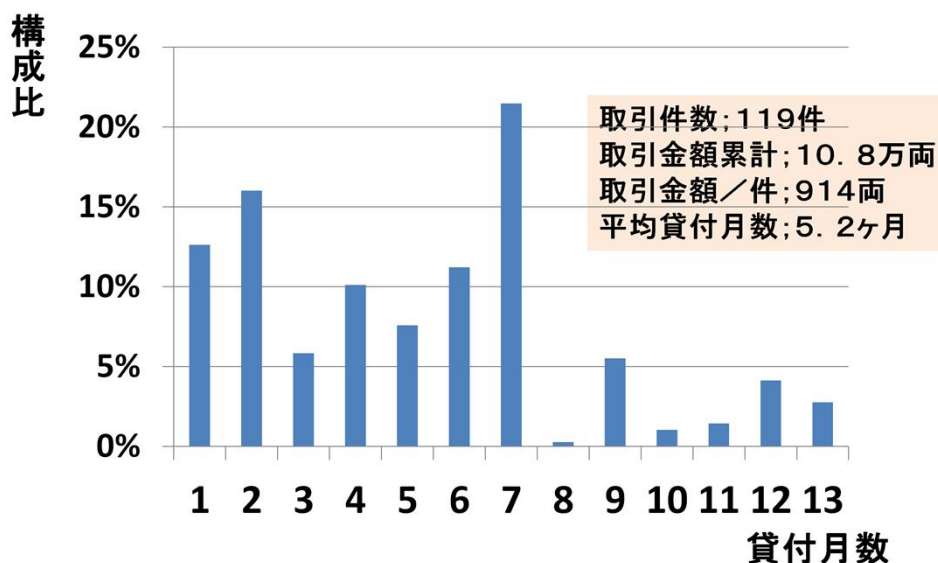
本間家にとって貸倒れリスクが小さい取引のはずだが、金利は当初年利15～18%（月利1.25～1.5%）中心と、長期貸出中心の渡辺家の利回り（9.5%）よりもかなり高い（研究4参照）。

上記は、他藩との金融取引にも当てはまる。本間家の大名への短期貸付は低リスクで収益性の高い事業だったと言える。

本間家の短期買付金利が長期貸出金利より高い理由として、次のような考えはどうだろうか。つまり、本間家を銀行と考えると、現在のように中央銀行があり、資金調達が全国から瞬時に可能な時代と違い、米沢藩のような大名からの突然で多額な融資に応じるには手元に多額な現金を準備しておく必要があったのではないだろうか。しかも酒田周辺では大量の資金を融通できるのは本間家のみで独占状態だったのではないだろうか。このような状況下、本間家は貸付金だけでなく、準備現金を含めたトータルでのリターンを考慮し、高い金利を短期貸付に課したのではないだろうか。

大半は半年以内の貸付だった

本間家の米沢藩向け短期貸付の貸付月数構成比分布



(出所)『酒田市史 史料篇第5集経済篇』データより著者算定

3) 貸付期間と貸付時期の分析

貸付開始日と返済予定日が分かる貸付取引119件から、

- ① 貸付期間がどう分布するか
- ② 貸付は何月スタートが多いのか、結果貸付残高は月ごとにどう分布するかを分析してみる。

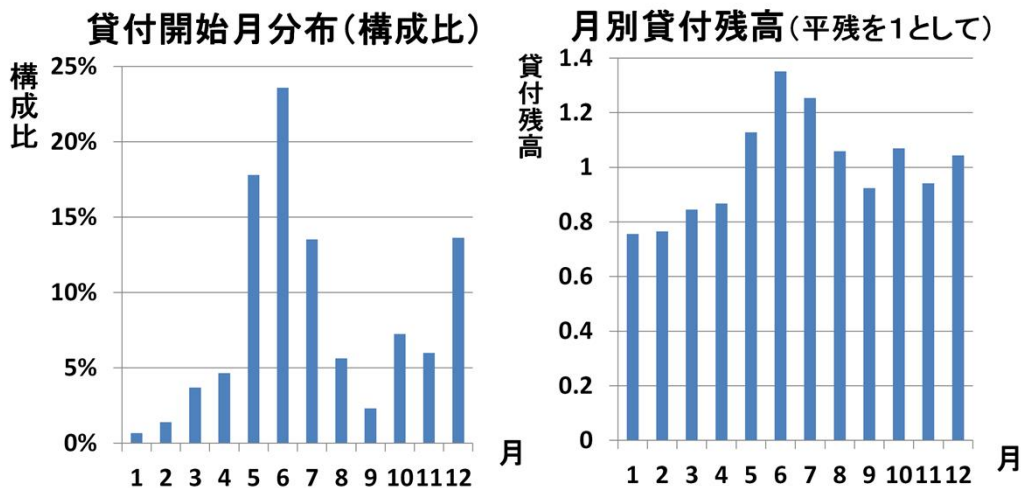
なお、貸付開始時の返済予定日が不明でも返済完了日が分かる場合は完了日を返済予定日として扱う。また、江戸時代は太陰暦を採用しており、3年に一度は1年が13ヶ月となる閏月がある(例えば2月の後に閏2月が入る)がここでは考慮しない(例えば、閏2月は先の2月に含める)。余談ながら、月利での短期貸付の場合、閏月も利払いが必要で閏月のある年は13回の利払いが行なわれる。

(1) 貸付月数構成比分布

短期貸付の買付月数の構成比分布をみたのが図である。なお貸付期間が分かる119件の取引金額累計10.8万両で、取引1件当たり取引金額あ914両である。

7か月も含めれば、ほぼ半年以内の貸付が85%を占め、金額加重平均で5.2年である。

5～7月、12月スタートの貸付が多い、 貸付残高も5～7月を山に年後半が多い



(出所)『酒田市史 史料篇第5集経済篇』データより著者算定

(2) 貸付開始月の分布、月別貸付残高

何月が取引開始となるかをみたのが、左図である(月別取引金額での構成比)。5～7月、12月スタートの貸付が多い。

筆者は、米沢藩農産物担保の貸付が多いことから収穫期の秋以降が多いのではと予想したが違う。本間家の農産物担保貸付は、農産物が酒田周辺に蔵入れされて発行される蔵入れ証券を担保に貸付られたようだ(担保物件が酒田周辺にあれば差し押さえやすい)。春以降に貸付が多いのは、一冬を越してから農産物流通が活発化するのだろうか。しかし、米沢・酒田簡には高い山もなく、当時は海運も整備されていたからそれは考えにくい。もしくは、5～7月頃、俸禄支払いなどで米沢藩として資金繰りが苦しくなる事情があるのだろうか。

貸付期間も考慮して、月別の貸付残高の平均像をみたのが右図である。5～7月を山に年後半が多い。

以上、本間家の米沢藩への短期貸付の詳しい実態を示すに留めておく。

I 期(1754~82年)の金融取引

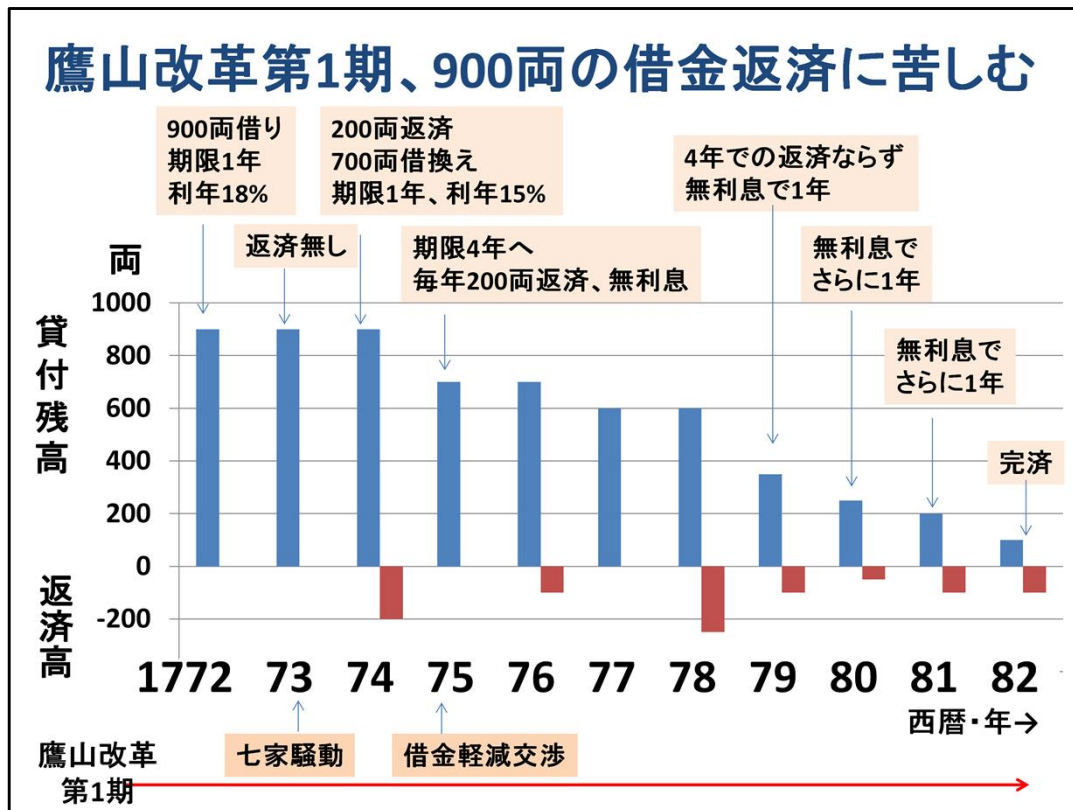
●「宝五の大飢饉」の頃の1754年から金融取引が始まった。前スライドで述べたように、金融取引の大部分は、長くて1年程度の短期貸出で、米・青苧などの藩産物を担保したものである。金利は年利15~18%(月利1.25~1.5%)が中心

●取引は少額で断続的。鷹山の時代に再開するが、返済も滞りがちだった。72年の期限1年の900両貸付の返済は、途絶えがちで途中無利息をはさみ(竹俣の借金軽減策の頃)で10年を要した。その返済を終えたのは1782年、竹俣が失脚する鷹山改革第1期終了年である。その間新規貸付はなく、本間家の厳しい貸付姿勢がうかがえる。

4. I 期(1754~82年)の金融取引

「宝五の大飢饉」の頃の1754年から金融取引が始まった。2頁前のスライドで述べたように、金融取引の大部分は、長くて1年程度の短期貸出で、米・青苧などの藩産物を担保したものである。金利は年利15~18%(月利1.25~1.5%)が中心である。

取引は少額で断続的である。鷹山の時代に再開するが、返済も滞りがちだった(4頁前スライド参照)。1772年の期限1年の900両の貸付の返済は、途絶えがちで途中無利息をはさみ(竹俣の借金負担軽減要請の頃)で10年を要した(次スライドで詳述)。その返済を終えたのは1782年、竹俣が失脚する鷹山改革第1期終了年である。その間新規貸付はなく、本間家の厳しい貸付姿勢がうかがえる。



鷹山改革第1期、900両の借金返済に苦しむ

図は、前スライドで示した、鷹山が藩主に就任して5年目の本間家からの期限1年の借入れ900両の約10年をかけての返済状況を示している。

鷹山が藩主に就任後の本間家からの借入れは、1768年1,000両、69年4回3,500両、70年1,000両と続いたが、70年1,000両の返済は返済が3ヶ月ほど遅れた。71年1,000両の借入れは、1年の期限だったが、翌年は利息のみの返済で、元金返済は2年目の72年7月だった。同じ72年7月に図に示す900両を借入れている。この借入れには藩産物の担保記載はなく、借入れの延長と思われる。70年頃から返済が滞りがちになっていたことが想像できる。

1772年の借入れ900両は期限1年(年利18%)だったが、翌年は返済はなく、さらにその翌年74年には200両を返済したが、残り700両を期限1年(年利15%)で借り換えている。75年、竹俣当綱が多くの金主に借金負担軽減を求めた年だが、本間家も同様に求められ、残り700両の期限4年無利息(毎年返済)を受入れたと思われる。その後の4年間の返済は合計450両にとどまり、78年末には250両の借入れが残った。その後も期限1年の借換えを繰返し、完済するのは、竹俣が失脚し第1期改革を終わる1782年であった。

この間、本間家からの新規貸付けはない。以上から、10万両超の借金を抱えた米沢藩が、900両の短期借入金返済に窮していたことが分かる。

Ⅱ期(1783~1801年)の金融取引① ~改革第2期

●改革第2期は、天明の大飢饉、南山館焼失などで米沢藩の財政は再悪化し、米沢藩は金主に対し次を求めた。

・1776年;加増のうえ、その年の借金返済猶予

・1777年;数万両の借財に対し、旧借財には無利息化・永年賦化、新借財には低金利(3%)化・永年賦化

→多くの金主は応じたが、その後の借金には応ぜず離反。

●その間長期貸付のなかった本間家は、金融取引(短期貸付)をむしろ活発化している。荻戸善政が第3期改革で再勤するのは1791年1月だが、その前年の金融取引額は1万7千両余に急増している。金利は年15%(月1.25%)中心
→米沢藩にとって本間家は唯一の大手金主だったと思われる

5. Ⅱ期(1783~1801年)の金融取引①~改革第2期

改革第2期は、天明の大飢饉、南山館焼失などで米沢藩の財政は再悪化し、米沢藩は長期貸付金主に対し次を求めた。

・1776年;加増のうえ、その年の借金返済猶予

・1777年;数万両の借財に対し、旧借財には無利息化・永年賦化、新借財には低金利(3%)化・永年賦化

それに対し、多くの金主は応じたが、憤りその後の借金には応じず離反したとされる。

その間長期貸付のなかった本間家は、金融取引(短期貸付)をむしろ活発化している。荻戸善政が第3期改革で再勤するのは1791年1月だが、その前年の金融取引額は1万7千両余に急増している。金利は年15%(月1.25%)中心と第Ⅰ期より低下した。

以上から本間家は、財政が再悪化した第2期改革から第3期改革への数年、米沢藩を支えた唯一もしくは少数の大手金主だったと思われる。

Ⅱ期(1783～1801年)の金融取引② ～改革第3期

1) 勸農資金貸付

●1793年、荻戸が財政再建計画を示した上で初めての長期借入2,500両を要請したところ、本間光丘はそれに応じ、勸農資金融資を提案し支援した。これは、米沢藩が本間家から4%の低利資金を借入れ、それを農民に8%で貸付け、その利ザヤを米沢藩が再融資するものである。

●なお、その頃同様の提案を本間家より受けた庄内藩は、他の提案である徳政(借金帳消し)を選択し、本間家は大きな損失をこうむっている。

●第3期改革で本間家が長期貸付に応じたことで、三谷家や渡辺家らも金主として復帰するようになり、鷹山はそのことを大いに喜んだとされる。

6. Ⅱ期(1783～1801年)の金融取引②改革第3期

改革第3期に入り、短期貸付の金利は、年利12%(月1%)中心に低下したと思われる。

1) 勸農資金貸付

1793年、荻戸が財政再建計画を示した上で初めての長期借入2,500両を要請したところ、後日、本間光丘はそれに応じ、勸農資金融資を提案し支援した。これは、米沢藩が本間家から4%の低利資金を借入れ、それを農民に8%で貸付け、その利ザヤを米沢藩が再融資するものである。

なお、その頃同様の提案を本間家より受けた庄内藩は、他の提案である徳政(借金帳消し)を選択し、本間家は大きな損失をこうむっている。

第3期改革で本間家が長期貸付に応じたことで、三谷家や渡辺家らも金主として復帰するようになり、鷹山はそのことを大いに喜んだとされる。

2) 荻戸善政と本間光丘の親交

●1793年、荻戸が本間光丘と尾関又兵衛に対し、米沢訪問を要請し、光丘の叔父・本間信四郎と尾関がおもむいた。そして、前述のとおり、荻戸は財政再建計画を示した上で初めての長期借入2,500両を要請、後日、本間光丘は勸農資金融資で応じた。

●94年7月19日～8月9日、荻戸は酒田・本間家を訪問し、光丘と親交を深めた。「大帳類聚抄」にはその際の次のような本間家の出費が記録されている。

7月24日	銭725文(0.2両)	荻戸様御提重入用菓子並びに砂糖代其外共
8月4日	金1両1歩24貫960文(1.3両)	荻戸様御振舞(もてなし並びに御家来祝儀其外諸雑用共
9月8日	銭680文(0.2両)	荻戸様へ進物之節箱代並びに状箱5ツ其外柄杓小物代共曲師長右衛門へ拂

●荻戸と光丘の親交はその後も続き、光丘は次に見るように支援を惜しまず、1801年光丘死亡後も、本間家の支援は続いた。

2) 荻戸善政と本間光丘の親交

1793年、荻戸が本間光丘と酒田御用商人・尾関又兵衛に対し、米沢訪問を要請し、光丘の叔父・本間信四郎と尾関がおもむいた。そして、前述のとおり、荻戸は財政再建計画を示した上で初めての長期借入2,500両を要請、本間光丘は勸農資金融資で応じた。

1794年7月19日～8月9日、荻戸は酒田・本間家を訪問し、光丘と親交を深めた。「大帳類聚抄」にはその際の本間家の出費が表のような記録されている。

荻戸と光丘の親交はその後も続き、光丘は次に見るように支援を惜しまず、1801年光丘死亡後も、本間家の支援は続いた。

3) その他の長期貸付と奉仕

● 次のような融資や奉仕が確認される。

- ・1794年からは毎年備籾代を献納することとなり、96年に7年分5百両を前納
- ・1796年;「諸士救済資金」として3千両融通
- ・1797年;越後沿岸防備軍用金として3千両提供
- ・1798年;藩債年賦金として5千両を融通

(以上の出所)五十嵐清一『上杉鷹山の人間愛』(昭18)など)

● 1803年;常平倉(穀物貯蔵)設立に尽力し、提供金の利子2千両を献納

(出所)酒田市史史料篇第5集本間家年表

● 第3期でようやく成功に至った米沢藩の藩政改革だが、このように本間家による第2期からの金融支援や奉仕によるところが大きい。

3) その他の長期貸付と奉仕

次のような融資や奉仕が確認される。

- ・1794年からは毎年備籾代を献納することとなり、96年に7年分5百両を前納
- ・1796年;「諸士救済資金」として3千両融通
- ・1797年;越後沿岸防備軍用金として3千両提供
- ・1798年;藩債年賦金として5千両を融通
- ・1803年;常平倉(穀物貯蔵)設立に尽力し、提供金の利子2千両を献納

第3期でようやく成功に至った米沢藩の藩政改革だが、このように本間家による第2期からの金融支援や奉仕によるところが大きい。

<完>

主な参考文献

- ・横山昭男『上杉鷹山』(吉川弘文館)1968年
- ・小野榮『米沢藩』(現代書館)2006年
- ・『酒田市史 上』(酒田市)1987年
- ・『酒田市史 史料篇5集経済篇』1971年
- ・鈴木旭『本間光丘』(ダイヤモンド社)1995年
- ・五十嵐清一『上杉鷹山の人間愛』1943年